

# 創刊五周年を迎えて

(挨拶要旨)

阿木津 英

八雁は、石田比呂志逝去による結社「牙」解散ののち、元「牙」会員有志四十数名と短歌研究誌「あまだむ」会員四十数名とが合流、それを母体として出発した短歌会です。思えば、創刊準備を始めた二〇一一年秋は、あの三・一一から半年後のこと、そうして今年四月は熊本大地震。その間の政治社会状況の変化には絶句するだろうか、二十世紀後半を生きてきた者には常識外の思いをさせられるような毎日です。

一昨年でしたか、「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」という俳句が、さいたま市三橋公民館だよりに掲載を拒否されたというニュースを読んだときには驚いて目を疑いました。七十四歳のおばあちゃんが公民館で趣味でやっている俳句です。二十人ばかりの互選で最高点をとったこの俳句は、いつもなら毎月発行の「公民館だより」俳句コーナーに掲載されるはずでしたが、公民館側が「公民館の意見と誤解される恐れがある」と掲載拒否を俳句教室に通告、その号は俳句コーナーを削除して発行したというのです。

何より素人のたのしみでやっている俳句です。皆の共感を

得た俳句の掲載を、この七十四歳の方は誇らしくも心待ちにしていたことでしょう。そんな世の片隅のささやかなたのしみを潰すほどの問題が、いつたいこの俳句のどこにあるのか。のちに市の教育長は「世論を二分している内容の作品は載せない」と明言したそうですが、何を証拠に世論を二分などというのか。そもそもこの俳句は「九条を守れ」と主義主張しているわけではありません。「九条を守れ」はプラカードであって、そういうプラカードを掲げる女性たちのデモがあった、と客観的に叙述しているのみ。そこに含むものが共感なのか反感なのか、それは読者にまかされている。何を根拠に共感と読んだのか、とわたしなら屁理屈の一つでも捏ねてねじ込んでやるどころです。

この俳句は素人らしいものなのかも知れませんが、秀句です。一読、わたしはとても良い句だと感じました。デモの主体が「女性」であるのがいいし、「梅雨空」と「女性デモ」がじつによく照りあっています。プラカードの「九条守れ」という主張に賛成して作ったというよりも、もっと全体的な、かつては外に出たがらなかった女性たちが平和を願う熱意を町に出て積極的に示そうとしている、そこに胸の底からの人間的な共感を覚えている、そんな俳句です。だからこそ教室の会員たちの賛同を得たのです。

このような俳句の掲載拒否とは、人間的な共感を公共の場から締め出すということを意味します。公権力を使つての、

人間の共感の力の否定。これは由々しきことではありませんか。人間の共感の力こそは文芸・芸術の根源であり、本質をなすものでしょう。この事件は、政治や法の問題というばかりではなく、芸術の根幹にかかわる問題に触れているのです。本当なら俳句団体がごぞつて反論し、声明を出してよいところですが、寡聞にしてそんな話は聞いていません。俳句どころか、短歌も詩も、文芸全般に関わる人々が声をあげなければならぬ問題でした。

こんな大事が、ささいな事象として次々にやり過ぎられていつているのが昨今です。このまま進んでいく果てには萎縮と自己規制、一方で新時流に乗つての太鼓持ちと、相場は決まっています。こんなたいへんな時代に生きて歌をつくることの意味はどこにあるのか。これからわたしたちは、どんな歌を作っていけばいいのか。誰もが考えないではいられないことを、わたしも昨日つらつら思い巡らしているうちに、ふと「不易流行」という語が浮かんできました。

ひさしぶりに書棚から埃を払つて岩波文庫『去来抄・三冊子・旅寝論』を開いたのですが、「不易流行」という言葉は「三冊子」の「あかさうし」冒頭に出てきます。

師の風雅に万代不易有。一時の変化あり。この二ツに究り、其本一也。その一といふは風雅の誠也。

師の風雅に万代変わらぬものがある。また一時の変化がある。師の風雅はこの二ツに極まって、本は一つである。その一つというのは風雅の誠である——有名な冒頭の一節で、このあともしばしば「風雅」「誠」と出てくるけれども、いたいこの「風雅の誠」とは何か。日本国語大辞典を引いてみますと「芭蕉が俳諧の美的理念と考えた、不易と流行との二面を統一する絶対的な精神を言う」と、簡にして要を得た説明がしてあります。でも、わかつたようでわからない。少なくとも実作者であるわたしたちには、頭の上をすーっと通り抜けてゆく身に染まない言葉です。そこで、この「風雅の誠」という言葉をもって芭蕉が何を言おうとしたのか、「あかさうし」の文面からその指すところを読み取つて、自分なりの翻訳を試みようと思いました。

まず「風雅」とは、辞書的な意味では「詩歌文章の道。文芸。芸術一般」ということになりましたけれども、もともと詩経から出た言葉です。詩経は紀元前四世紀中頃に中国大陸に成立した、日本で言えば記紀歌謡のようなものにあたります。詩経は国風・雅・頌から成っています。国風とは訓ずれば国ぶり、各国の民間でうたわれた主に男女の思いをうたう歌です。雅には小雅と大雅とがあつて、政治的な意味をもつ宗教的な仮面舞踏劇詩をいうのだそうです。ようするに、詩経の粹たる風と雅とは歌のふるさと、記紀歌謡成立より古いいわば東洋における歌のふるさとということになります。

風とはただようて物を揺るがすという意味でもあるそうですが、たんにただよう歌声の呪力で相手の心を動かすばかりでなく、風雅という語のちには芸術一般をさすように、そこから人類の歴史はこの上なくうつくしいもの、より良いもの、あるべきものを見出してゆきました。

そこでわたしは、「風雅」という語に「人類にとって良きもの」という翻訳語を与えてみました。「誠」とは、辞書的な意味では「真事、真実、実際」ということになりませんが、「その生まれ出るところ」と訳しました。したがって「風雅の誠」とは、「人類にとつて良きもの、その生まれ出るところ」という意味になります。

常に風雅の誠をせめざとりて、今なす処俳諧に帰るべしと云る也。

したがって、これを読み解くならば「人類にとつて良きもの、その生まれ出たところをつねに振り返り、どのようにしてこの良きものは生まれ出たのかと問いに問うて自ら悟り、ひるがえって今あなたがなしている俳諧にそれを実現するようになさいといわれた」という意味になります。

師の風雅に万代不易と一時流行とがあるが、根本は一つ「風雅の誠」であるという冒頭の語はしたがって、芭蕉はおのが芸術観の根底に「人類は必ず良きものを生み出す存在である」

という信頼を据えたということになります。でもね、ちよつと振り返ればわかるように、おのれを含めて人類なんてろくなものではないでしょう。相変わらず戦争はするし、愚劣で悪辣で、憎悪と保身と欲望に渦巻いています。芭蕉の生きた時代だつて同じでしょう。にも関わらず、芭蕉は「人類は必ず良きものを生み出す存在である」、そのことは不易だ、と言いつ切っているのです。これはたいへんなことです。

しかし、「その生まれ出るところ」は、時代の変化によつても、年齢の変化によつても、一年の春秋によつても、時の変化にしたがつてつねに変化する。「四時の推移如く物あらたまる。皆かくのごとし」。おし移るにしたがつて誠を「せむるものはその地に足をすべがたく、一步自然に進む理也」。これは、時代の変化には追いついていかなきゃとか、新しい時代には新しい歌をとか、そんな話じゃありません。

冒頭に話を戻せば、昨今はいよいよ愚劣な人間悪の栄える時代ともいえそうで、悪い方にばかり変わっているようにも思えます。しかし、大きく見渡せば人類の歴史のなかには良きものの生まれ出づるところがあると、きちんと証されている。そういう「風雅の誠」を尋ねたあとが残っている。わたしたちも芭蕉にならつてそこに信を置きたいものです。

八雁はほんとうにささやかな場ですが、つねに「風雅の誠」をせめて一步おのずと足をすすめ、己を新しくしようとす者の、たましいの自由を護る場でありたいと思います。